

制酸薬

製品群No. 10

ワークシートNo.8

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
		相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの			特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				
制酸成分	ケイ酸アルミニウム	スビーゲル	酸中和作用 制酸薬		テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤(これらの薬剤の効果が減弱)、併用薬剤(併用薬剤の吸収・排泄に影響)			頻度不明(悪心・嘔吐・便秘・下痢・口渇等・かゆみ)		透析療法(長期投与によりアルミニウム脳症、アルミニウム骨症)	腎障害、心機能障害、高マグネシウム血症、リン酸塩低下、高齢者				長期大量投与により高マグネシウム血症、腎障害のある患者に長期投与でアルミニウム脳症・アルミニウム骨症		通常成人1日1.5~4gを3~4回に分けて経口投与する。高齢者では減量。	胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎、薬剤性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む)の症状の改善
	メタケイ酸アルミニウム	メタスタミン	制酸作用、抗潰瘍作用		テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤(抗菌薬の効果が減弱)			悪心、嘔吐、便秘、下痢、口渇	かゆみ	透析療法中	腎障害、心障害、高マグネシウム血症、リン酸塩低下者、高齢者				腎障害のある患者に長期投与時、アルミニウム脳症、アルミニウム骨症、長期大量投与時、高マグネシウム血症		1日1.5~4g、3~4回分服。適宜増減	次の疾患における制酸作用と症状の改善: 胃・十二指腸潰瘍、胃炎、上部消化管機能異常
	合成ヒドロタルサイト	サモールN	制酸作用、抗ペプシン作用、抗潰瘍作用		テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤(抗菌薬の効果が減弱)、他の併用薬剤(他の併用薬剤の吸収・排泄に影響)、大量の牛乳、カルシウム製剤(ミルク・アルカリ症候群)	長期投与時、アルミニウム脳症、アルミニウム骨症、		下痢、軟便、食欲不振、口渇		透析療法中	腎障害、心障害、下痢、高マグネシウム血症、リン酸塩の欠乏者、高齢者				長期投与時、アルミニウム脳症、アルミニウム骨症、長期大量投与時、高マグネシウム血症		1回0.5~1.0g、3~4回症状が起こりやすい時間に合わせて、食後又は食間(必要な場合は就寝前)に経口投与	胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃酸過多、急性胃炎、慢性胃炎における制酸
	酸化マグネシウム	マグラックス錠	胃内で制酸作用。腸内での水分の再吸収に抑制的に働き腸管内容物が膨張し腸管に機械的な刺激を与えて排便を容易にする。		テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤・セフジニル(これらの薬剤の吸収を阻害)、高カルシウム血症改善イオン交換樹脂製剤(これらの効果が減弱)、活性型ビタミンD3製剤(高マグネシウム血症を発生)、大量の牛乳・カルシウム製剤(milk-alkali syndromeを発生)、ジギタリス製剤・鉄剤等(薬剤の吸収・排泄に影響)			頻度不明(高マグネシウム血症、下痢)			腎障害、心機能障害、下痢、高マグネシウム血症、高齢者				長期・大量投与により胃・腸管内に結石を形成し、腸閉塞を起こしたとの報告。高マグネシウム血症		1.酸化マグネシウムとして、通常成人1日0.5~1.0gを数回に分けて経口投与する。 2.酸化マグネシウムとして、通常成人1日2gを食前又は食後の3回に分けて経口投与するか、又は就寝前に1回投与する。 3.酸化マグネシウムとして、通常成人1日0.2~0.6gを多量の水とともに経口投与する。 なお、いずれの場合も年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	1.下記疾患における制酸作用と症状の改善: 胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎、薬剤性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む) 2.便秘症 3.尿路結石・カルシウム結石の発生予防
	ジヒドロキシアリニウム	ダイアルミン	ダイアルミン															

制酸薬

製品群No. 10

ワークシートNo.8

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		D 薬理に基づく 留意性	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
			重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ			適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康障 害のおそれ	
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康障 害のおそれ	用法用量	効能効果
乾燥水酸化 アルミニウム ゲル	ホエミゲル	制酸作用、粘 膜保護作用、 取れん作用		クエン酸製剤(血中アルミニ ウム濃度が上昇、血清カリ ウム抑制イオン交換樹脂(併 用薬剤の効果が減弱) テトラサイクリン系抗生物質・ ニューキノロン系抗菌剤・イ ソニアジド・ジギタリス製剤・ フェニトイン・フェノチアジン 誘導体・β-遮断剤・非ステ ロイド系解熱消炎鎮痛剤等 (併用薬剤の吸収を遅延又 は阻害)、ペニシラミン(併用 薬剤の効果が減弱)、ミコ フェノール酸モフェチル(併用 薬剤の作用が減弱)、甲状 腺ホルモン剤・胆汁酸製剤 (併用薬剤の吸収を遅延又 は阻害)・キニン等(併用 薬剤の排泄が遅延)			頻度不明(便 秘・悪心・嘔 吐等・アルミ ニウム脳症、 アルミニウム 骨症等)		透析療法(長期投 与によりアルミニ ウム脳症、アルミ ニウム骨症)	リン酸塩の欠乏、 腎障害、高齢者						アルミニウム 脳症・アルミ ニウム骨症	乾燥水酸化アルミニウム ゲルとして1日1~3gを数 回に分割経口投与する。	下記疾患にお ける制酸作用 と症状の改善 胃・十二指腸 潰瘍、胃炎 (急・慢性胃 炎、薬剤性胃 炎を含む)、上 部消化管機能 異常(神経性 食思不振、い わゆる胃下垂 症、胃酸過多 症を含む) 尿中リン排泄 増加に伴う尿 路結石の発生 予防
胃酸水素ナ トリウム	重曹錠 500mg「メル ク」	制酸作用。尿 酸排泄抑制 作用(尿のpH をアルカリ性 にする)、尿 路結石の予 防。	マンデル酸へ キサミン(併用 薬剤の効果を 減弱)	大量の牛乳・カルシウム製 剤[milk-alkali syndrome(高 カルシウム血症・高窒素血 症・アルカローシス等)]、 他の併用薬剤(併用薬剤の 吸収・排泄に影響)		頻度不明(浮 腫、胃部膨 満、胃酸の二 次分泌)		高ナトリウム血 症、浮腫、好中 球症等のナトリ ウム摂取制限(症状 悪化)	重篤な消化性潰 瘍、腎障害、心機 能障害、肺機能障 害、低クローラ性アル カローシス等の電 解質失調	重篤な消化 性潰瘍患者 において胃 液の二次的 分泌-リバウ ンド現象-の 可能性						胃酸水素ナトリウムとし て、1日3~5g(6錠~10錠) を数回に分割経口投与す る。 高齢者では減量。	胃・十二指腸 潰瘍、胃炎 (急・慢性胃 炎、薬剤性胃 炎を含む)、上 部消化管機能 異常(神経性 食思不振、い わゆる胃下垂 症、胃酸過多 症を含む)にお ける制酸作用 と症状の改善 、アンダーシ スの改善、尿酸 排泄の促進と 痛風発作の予 防	
胃酸マグネシ ウム	「純生」炭 酸マグネシ ウム	制酸作用。効 力は酸化マグ ネシウムの約 1/2。胃下作 用。硫酸マグ ネシウムに劣 る。 非吸収性であ り、アルカ ローシスを生 じない。		テトラサイクリン系抗生物質・ ニューキノロン系抗菌剤・エ チドロン酸ナトリウム・セフ ジニル(これらの薬剤の効果が 減弱)、他の併用薬剤(併 用薬剤の吸収・排泄に影響)、 大量の牛乳・カルシウ ム製剤[milk-alkali syndrome (高カルシウム血症・高窒素 血症・アルカローシス等)]		頻度不明(高 マグネシウム 血症・下痢)		腎障害、心機能障 害、高マグネシ ウム血症、下痢、高 齢者								長期大量投 与で高マグネ シウム血症	1.1日2gを数回に分割経 口投与。高齢者では減量 2.1日3~8gを頓用又は 数回に分割経口投与。 高齢者では減量。	1.胃・十二指腸 潰瘍、胃炎 (急・慢性胃 炎、薬剤性胃 炎を含む)、上 部消化管機能 異常(神経性 食思不振、い わゆる胃下垂 、胃酸過多症) における制酸 作用と症状の 改善 2.便秘症

制酸薬

製品群No. 10

ワークシートNo.8

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)		症状の悪化 につながるおそれ		適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		用法用量	機能効果		
制酸成分	沈降炭酸カルシウム	沈降炭酸カルシウム	制酸作用				5%以上又は頻度不明(高カルシウム血症) 症・アルカローシス等の 電解質失調・腎結石・尿 路結石・悪心・嘔吐・便秘 ・下痢)・0.1%未満(胃酸 の反動性分泌)	5%以上又は頻度不明(過 敏症)			甲状腺機能低下 症又は副甲状腺機能亢進 症(症状悪化)	腎障害、心機能障害、 肺機能障害、高カルシウム 血症、便秘、高齢者	胃酸の反動 性分泌				腎結石、尿路 結石		沈降炭酸カルシウムとし て、1日1~3gを3~4回 に分経口投与。 高齢者では減量。	胃・十二指腸潰瘍、胃炎 (急・慢性胃炎、薬毒性胃 炎を含む)、上部消化管機能 異常(神経性食 思不振、いわゆる胃下垂 症、胃酸過多 症を含む)の症 状の改善		
	ロートエキス	ロートエキス 散「ホエイ」	副交感神経 抑制作用:ア セチルコリン のムスカリン 作用と競合 的に拮抗。胃 酸又はペプ シンの分泌を 抑制。		三環系抗うつ剤・フェノテ アジン系薬剤・モノアミン酸化 酵素阻害剤・抗ヒスタミン剤・ イソニアジド(抗コリン作用の 増強)		頻度不明(視 調節障害・散 瞳・羞明・め まい・霧視・ 調節障害等・ 口渇・悪心・ 嘔吐・便秘 等・排尿障 害・頭痛・頭 重感・めまい 等・顔面等・ 顔面潮紅) 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作	頻度不明(過 敏症)			緑内障(症状悪 化) 前立腺肥大 による排尿障害 (症状悪化) 重篤 な疾患(症状悪 化) 麻痺性イレ ウス(症状悪化)	前立腺肥大、うっ血 性心不全、不整 脈、潰瘍性大腸 炎、甲状腺機能亢 進症、高温環境、 高齢者、妊婦また は妊娠している可 能性のある婦人、 授乳婦							ロートエキスとして、1日20 ~90mg(本剤:0.2~0.9g) を2~3回に分経口投 与。	胃酸過多・胃 炎・胃・十二指 腸潰瘍・痙攣 性便秘におけ る分必・運動亢 進並びに疼痛		

制酸薬

製品群No. 10

ワークシートNo.8

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそ れ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
胃酸分泌抑制成分	塩酸ピレンゼ ピン	ガストロゼピ ン錠	選択的ムスカ リン受容体拮 抗薬: 酸分泌 抑制作用、抗 ガストリン作 用		無顆粒球症 (頻度不明)	アナフィラキ シー様症状 (頻度不明)	0.1~5%未 満(口渇・便 秘・下痢・悪 心・嘔吐)。 0.1%未満 (歯肉痛・膨 満感・排原因 難・残尿感・ AST(GOT)上 昇・ ALT(GPT)上 昇・心悸亢 進・頭重感・ たちくらみ・脱 力感・嘔声・ 眼のちらつ き・眼の乾燥 感に伴う流 涙・眼の調節 障)	0.1~5%未 満(過敏症)	過敏症の既往歴	前立腺肥大、緑内 障、妊婦又は妊娠 している可能性 のある婦人、授乳婦、 低出生体重児、新 生児、乳児、幼児 又は小児、高齢者							1回1錠(塩酸ピレンゼピン 無水物として25mg)を、1 日3~4回経口投与。 高齢者では減量。	急性胃炎・慢性 胃炎の急性 増悪期の胃粘 膜病変(びらん、 出血、発赤、 付着粘液)並 びに消化器 症状の改善。 胃潰瘍・十二 指腸潰瘍

健胃薬

製品群No. 11

ワークシートNo.9

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点		薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの		適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量以上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
酵母	乾燥酵母 「ホエイ」	乾燥酵母は含有する糖成分が総合して栄養補給、代謝機能促進、食欲増進、整腸などの薬効を現す。					頻度不明(大量投与による下痢)							大量で下痢			乾燥酵母として、通常成人1日5～10gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	ビタミンB群、たん白質の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給	
	塩化カルニチン	アベダイン液	副交感神経興奮薬:胃液中のペプシン量と胃酸度の増加				頻度不明(胸やけ、嘔気等)			過敏症(増悪) 急性肺炎又は慢性肺炎で急性増悪がみられる(症状が増悪)	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、新生児・未熟児						塩化カルニチンとして、通常成人1日100～600mg(本剤1～6 mL)を3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	消化管機能低下のみられる慢性胃炎	
胃腸機能調整成分	マレイン酸トリメブテン	セレキノン錠	胃腸機能調整薬:運動調節作用、運動機能障害				0.1%未満(便秘、下痢、腹痛、口渇、口内しびれ感、悪心、嘔吐、心悸亢進、眠気、めまい、けん怠感、頭痛、AST(GOT)・ALT(GPT)の上昇、排尿障害、尿閉)	0.1%未満(過敏症)			妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、小児						1.マレイン酸トリメブテンとして、通常成人1日量300mg(錠3錠、細粒1.5g)を3回に分けて経口投与。高齢者では減量。 2.マレイン酸トリメブテンとして、通常成人1日量300～600mg(錠3～6錠、細粒1.5～3.0g)を3回に分けて経口投与。高齢者では減量。	1.慢性胃炎における消化器症状(腹部疼痛、悪心、あじ気、腹部膨満感) 2.過敏性腸症候群	

整腸薬

製品群No. 12

ワークシートNo.10

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
			重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量			機能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	機能効果	
併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意																
乳酸菌成分	アシドフィルス菌末																
	ビフィズス菌末	ビフィダー	ビフィズス菌は、腸内で増殖し、乳酸と酢酸を産生して腸内菌叢の正常化をはかり、整腸作用をあらわす(ビオフェルミン錠)													通常、成人1日3～6錠を3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	効能又は効果 腸内菌叢の異常による諸症状の改善
	ラクトミン	フソラクトミン末	ラクトミンは、腸内菌叢異常の原因を除き、バランスの回復、諸症状の改善に有効													通常成人1日3～9gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
	ラックビー	ラックビー／ラックビー顆粒	腸内菌叢改善作用: 健康成人に本剤を投与したところ、ビフィズス菌が増殖し、腸内の優勢菌叢を増し、腸内菌叢の正常化を促すとともに、ビフィズス菌により産生される酸により、腸内pHを低下させ、有害細菌が増殖し難い環境をつくる。													通常成人1日3～6gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
	ラクボン	ラクボン	本剤は腸管内で発芽・繁殖し(マウスの実験から)、乳酸を産生して腸内の腐敗細菌叢の増殖を抑制して、整腸作用を営													通常成人1日3～8gを3回に分割経口投与する。小児は通常1日1.5～3gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
腸菌成分	宮入菌末	ミヤBM細菌粒	腸内細菌に対する作用、化学療法剤投与時における整腸作用、その他整腸作用を有する													腸内菌叢の異常による諸症状の改善	通常、成人1日1.5g～3gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

消化薬

製品群No. 13

ワークシートNo.11

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換えるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
でんぶん 消化 酵素	ジアスターゼ	ジアスターゼ	アミラーゼと してでんぶん 分解をする。					5%以上また は頻度不明 (過敏症)		本剤に対し過敏症 既往歴								1回0.3~0.5g、1日3回、適 宜増減	主として炭水 化物の消化異 常症状の改善
	ジアスマン	単味なし																	
蛋白消化 酵素	ニューラーゼ	単味なし																	
	プロザイム	単味なし																	
脂肪消化 酵素	ホリバーゼ	単味なし																	
	リバーゼ	単味なし																	
繊維消化 酵素	セルラーゼ	単味なし																	
	セルロシン	単味なし																	
複合消化 酵素	タカヂアス ターゼ	タカヂアス ターゼ	主として炭水 化物の消化					頻度不明(過 敏症)										1回0.2~0.3g、1日3回、適 宜増減	主として炭水 化物の消化異 常症状の改善
	バンクレアチ ン	バンクレア チン	消化作用					5%以上また は頻度不明 (過敏症)		本剤過敏症既往 歴、ウシまたはブ タ蛋白質に対し過 敏症既往歴							1回1g、1日3回、適宜増減	消化異常症状	
	ピオヂアス ターゼ	単味なし																	
	ピオタミラー ゼ	単味なし																	

消化薬

製品群No. 13

ワークシートNo.11

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの										
胆汁成分	ウルソデオキ シコール酸	ウルソ錠	利胆作用及 び胆汁うっ滞 改善作用、肝 機能改善作 用、胆石溶解 作用		スルフォニル尿素系経口糖 尿病用薬(血糖降下作用増 強)、コレスチラミン等・制酸 剤・脂質低下剤(本剤の作用 減弱)		間質性肺炎 (頻度不明)	1~5%未満 (下痢)、0.1~ 1%未満(悪 心、食欲不 振、胸やけ、 AST(GOT)・ ALT(GPT)・ Al-P上昇)、 0.1%未満 (嘔吐、腹 痛、便秘、胃 不快感等、全 身けん怠感、 めまい、白血 球減少)、頻 度不明(ビリ ルビン上昇、 γ-GTP上 昇)		完全胆道閉塞(症 状憎悪)、劇症肝 炎(症状憎悪)	重篤な痔疾患、消 化性潰瘍、胆管胆 石、妊婦又は妊娠 している可能性 のある婦人、原発性 胆汁性肝硬変にお ける肝機能の改善 を目的で硬変期で 高度の黄疸のある 場合			原発性胆汁 性肝硬変に おける肝機 能の改善に おいて1日 900mgまで		1日1回50mgを1日3回経口 投与する。 2.1日600mgを3回に分割 経口投与。 3.1日600mgを3回に分割 経口投与する。増量する 場合の1日最大投与量は 900mgとする。 高齢者は用量に注意する	1.下記疾患に おける利胆[胆 道(胆管・胆の う)系疾患及び 胆汁うっ滞を 伴う肝疾患]、 慢性肝疾患に おける肝機能 の改善、下記 疾患における 消化不良[小 腸切除後遺 症、炎症性小 腸疾患] 2.外殻石灰化 を認めないコ レステロール系 胆石の溶解 3.原発性胆汁 性肝硬変にお ける肝機能の 改善
胆汁末			なし														
	デヒドロコ ール酸	デヒドロコ ール酸注射液					ショック(注射 投与による) (頻度不明)	頻度不明(悪 心・嘔吐、軟 便、下痢、発 赤、全身掻痒 感、悪寒、頭 痛、不快感)		完全胆道閉塞(病 像の悪化)、急性 期の肝・胆道疾患 (炎症に悪影響)、 重篤な肝障害(悪 化)、気管支喘息・ アレルギー疾患 (ショックの報告)	高齢者、12歳以下 の小児、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人			大量投与により 原疾患の悪化		1日100~1000mgを1~3 日間隔で静注。適宜増減	下記疾患にお ける利胆・胆道 (胆管・胆のう) 系疾患および 胆汁うっ滞を 伴う肝疾患

制酸・健胃・消化・整腸を2以上標榜するもの

製品群No. 14

ワークシートNo.12

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果	
						適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				スイッチ 化等に伴う使 用環境の 変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ 化等に伴う使 用環境の 変化	用法用量	効能効果	
粘 膜 修 復 成 分	アズレンスルホン酸ナトリウム	アズノール細粒	胃炎・胃潰瘍治療薬。粘膜抵抗強化作用を有し、潰瘍病巣を保護する				頻度不明(下痢、便秘・膨満感、腹痛・悪心・嘔吐等)							アズレンスルホン酸ナトリウムとして、1回2mg(アズノール細粒(0.4%)として0.5g、アズノール細粒(1%)として0.2g)を1日3回食前に経口投与(1回量を約100mLの水又は微温湯に溶解することが望ましい)。	胃炎・胃潰瘍における自覚症状及び他覚所見の改善	
	アルジオキサ	イサロン	胃炎・胃潰瘍治療薬。粘膜抵抗強化作用を有し、組織修復を促進する	テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤(併用薬の作用減弱)			0.1~5%未満(便秘)		透析療法(アルミニウム脳症・アルミニウム骨症)	腎障害、高齢者		アルミニウム脳症・アルミニウム骨症(腎障害患者)		アルジオキサとして1日300~400mgを3~4回に分けて経口投与	胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃炎の自覚症状及び他覚所見の改善	
	グリチルリチン酸塩	グリチルリチン酸モノアンモニウム・グリチロン注一号	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、橋本病(甲状腺機能亢進症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤))			偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等			長期連用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
	L-グルタミン	グルミン顆粒	胃潰瘍・十二指腸潰瘍治療薬。粘膜抵抗強化作用を有し、組織修復を促進する					0.1~5%未満(便秘、口渇、悪心、顔面紅潮)							1日1~2gを3~4回に分けて経口投与。 高齢者では減量。	胃潰瘍、十二指腸潰瘍の自覚症状及び他覚所見の改善
	ゲファルナート	ゲファニールカプセル	胃潰瘍・十二指腸潰瘍治療薬。粘膜抵抗強化作用を有し、組織修復を促進する					0.1~5%未満(便秘、口渇、悪心、上腹部不快感)、0.1%未満(口内炎、下痢、舌炎、AST(GOT)・ALT(GPT)軽度上昇)	0.1%未満(過敏症)		高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				ゲファルナートとして1回50~100mgを1日2~3回経口投与。 高齢者では減量。	急性胃炎・慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善、胃潰瘍・十二指腸潰瘍
	銅クロロフィリン塩															
スクラルファート	アルサルミン錠	胃炎・消化性潰瘍治療薬。粘膜抵抗強化作用を有し、潰瘍病巣を保護する	クエン酸製剤(血中アルミニウム濃度上昇)、血清カリウム抑制イオン交換樹脂・ニューキノロン系抗菌剤・ジギタリス製剤・フェニトイン・テトラサイクリン系抗生物質等・甲状腺ホルモン剤・胆汁酸製剤(併用薬剤の吸収遅延・阻害、服用時間をずらす)キニジン(併用薬剤の排泄遅延)				0.1~5%未満(便秘、口渇、悪心)、0.1%未満(嘔気等)	頻度不明(発疹、尋麻疹等)	透析療法・長期投与によりアルミニウム脳症、アルミニウム骨症、リン酸塩の欠乏(リン酸塩の吸収阻害)、経管栄養剤・低出生体重児および新生児発育不全、高齢者			アルミニウム脳症・アルミニウム骨症等		1回1gずつ、1日3回経口投与。	胃・十二指腸潰瘍、急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善	

制酸・健胃・消化・整腸を2以上標榜するもの

製品群No. 14

ワークシートNo.12

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		相互作用	併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ			重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ			
	塩酸セトラキサート	ノイエルカプセル	胃炎・胃潰瘍治療薬・防御因子を強化し、胃粘膜微小循環改善作用を有する						血栓(脳血栓、心筋梗塞、血栓性静脈炎等)、消費性凝固障害、妊婦または妊娠している可能性のある婦人					塩酸セトラキサートとして1回200mg(1カプセルまたは細粒0.5g)を1日3~4回食後および就寝前に経口投与	急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善、胃潰瘍
粘膜修復成分	ソファルコン	セサファルコカプセル	胃炎・胃潰瘍治療薬・防御因子を強化し、粘膜保護・組織修復作用を有する			肝機能障害・黄疸(頻度不明)			妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳中の婦人、小児等					ソファルコンとして1回100mgを1日3回経口投与	急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、急性潰瘍)の改善、胃潰瘍
	メチルメチオニンスルホンウムクロライド	キャベジンU	胃炎・消化性潰瘍・慢性肝疾患治療薬・防御因子を強化し、組織修復作用を有する。また肝障害改善作用を有する。						妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児、高齢者					1回25~75mgを1日3回経口投与。 高齢者では減量。	胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃炎における自覚症状及び他覚所見の改善、慢性肝疾患における肝機能の改善
消化成分	ジメチルポリシロキササン	ガスコン錠	胃内有泡性粘液除去作用を有し、消化管内ガスを駆除する											1. 1日120~240mgを食後又は食間の3回に分けて経口投与 2. 検査15~40分前に40~80mgを約10mLの水とともに経口投与 3. 検査3~4日前より1日120~240mgを食後又は食間の3回に分けて経口投与	1. 胃腸管内のガスに起因する腹部症状の改善 2. 胃内視鏡検査時における胃内有泡性粘液の除去 3. 腹部X線検査時における腸内ガスの駆除

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化									
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 留償性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量(正 適量使用・過 量使用のお それ)	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
副交感神経遮断成分	塩酸オキシンフェンサイクリミン																	
	塩酸ジサイクロミン	レスボリミン錠	アセチルコリンによる収縮を抑制し、腸管の自発運動、アセチルコリンによる収縮を抑制する。食物の腸管輸送速度を低下させる。	三環系抗うつ薬(抗コリン作用増強(散瞳、排尿障害、心悸亢進、頻脈、便秘、口内乾燥等)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強))		頻度不明(過視調節障害、眼圧亢進、頭痛、頭暈感、眩暈、眠気、口渇、便秘、悪心、嘔吐、腹部膨満・不快感、鼓腸、食欲不振、心悸亢進、排尿障害、心悸亢進、倦怠感、脱力感)、視調節障害・眠気等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心臓病、麻痺性イレウス、自動車の運転注意(視調節障害、眠気)。	前立腺肥大症、心臓病(うっ血性心不全、不整脈等)、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦及び妊娠の可能性、授乳婦、小児							1回10~20mg、1日3~4回経口、適宜増減	下痢疾患における痙攣、胃・十二指腸潰瘍、食道潰瘍、幽門痙攣、胃炎、潰瘍性大腸炎、憩室炎、過敏性便秘、過敏性大腸炎、小児の嘔吐、胆のう・胆管炎、胆石症、尿路結石症、月経困難症
	臭化メチルアトロピン	なし																
	臭化メチルベナクチウム	配合剤のみ																
	臭化メチルオクタロピン	バルビン錠	鎮痙作用、胃液分泌抑制作用	抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用の増強)、MAO阻害薬(本剤の作用増強)		頻度不明(視調節障害、口渇、悪心、胸焼け、便秘、下痢、食欲不振、腹部膨満感、排尿障害、眠気、めまい、頭痛、不快感、倦怠感)、視調節障害等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症状、顔面浮腫		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心疾患、麻痺性イレウス	前立腺肥大症、うっ血性心不全、不整脈、高血圧、肝又は腎疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、授乳婦、自動車の運転等(視調節障害、眠気、めまい)							1回10~20mg、1日2~4回経口投与、適宜増減	下痢疾患における痙攣および疼痛、胃・十二指腸潰瘍、胃炎、腸炎、胆石症

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
臭化ブチル スコボラミン	ブスコパン 錠	鎮痙作用、消 化管運動抑 制作用、胃液 分泌抑制作 用、膀胱内圧 上昇抑制作 用	三環系抗うつ薬(抗コリン作 用(口渇・便秘・眼の調節障 害増強)、フェニチジン系薬 (抗コリン作用増強)、MAO 阻害薬(抗コリン作用増強)、 抗ヒスタミン薬(抗コリン作用 増強)			0.1~5%(視 調節障害、腹 部膨満感、鼓 腸、便秘、尿 尿障害、頭 痛、頭重感、 心悸亢進)、 頻度不明(口 渇)、視調節 障害・眠気等 を起こす事 があるので、自 動車の運転 等危険を伴う 機械の操作 に従事させ ない。	過敏症	出血性大腸炎、線 内腫、前立腺肥大 による排尿障害、 重篤な心障害、麻 痺性イレウス、本 剤過敏症既往歴、 細菌性下痢	細菌性下痢 (治療期間の 延長をきたす おそれ)				1回10~20mg、1日3~5 回経口投与、適宜増減	下記疾患にお ける悪化：胃・ 十二指腸潰 瘍、食道潰瘍、 幽門痙攣、胃 炎、腸炎、腸山 痛、痙攣性便 秘、機能性下 痢、胆のう・胆 道ジスキネ ジー、胆のう切 除後の後遺 症、尿路結石 症、膀胱炎、月 経困難症
臭化チメピ ウム														
ヨウ化イソ プロバミド														
ロートエキ ス	ロートエキ ス 散純正	ムスカリン様 受容体にお いて副交感神 経性及び外 因性のアセチ ルコリンと競 合的に拮抗。 胃酸又はペプ シン分泌抑 制、抗ストレ ス潰瘍作用、 胃細胞保護 作用、小腸運 動または腸液 分泌抑制作 用、鎮痛作 用、血圧降下 作用、鎮けい 作用	三環系抗うつ薬、フェニチ ジン系、MAO阻害薬、抗ヒス タミン薬、イソニアジド(本剤 の作用増強)			頻度不明(散 瞳、しゅう明、 霧視、視調節 障害、口渇、 悪心、嘔吐、 便秘、排尿障 害、頭痛、頭 重感、めま い、頻脈)、 視調節障害・ 散瞳・しゅう 明・めまい等 を起こす事 があるので、自 動車の運転 等危険を伴う 機械の操作 に従事させ ない。	過敏症、顔面 紅潮	線内腫、前立腺肥 大による排尿障 害、重篤な心疾 患、麻痺性イレウ ス	高齢者、妊婦又は 妊娠の可能性、授 乳婦、自動車の運 転等(視調節障害、 散瞳、しゅう明、め まい)				1日20~90mg、2~3回分 服。適宜増減	下記疾患にお ける分泌、運 動亢進ならび に疼痛、胃酸 過多、胃炎、 胃・十二指腸 潰瘍、痙攣性 便秘
鎮 痙 成分	塩酸バロバ リン	平滑筋の弛 緩作用、血管 平滑筋の異 常緊張を抑制 し、血流量を 増加、内臓 平滑筋を弛 緩し、鎮けい 作用。	レボドパ(レボドパの作用減 弱)			頻度不明(心 悸亢進、血圧 上昇、めま い、眠気、頭 痛、便秘、口 渇、食欲不振、 心臓部痛、顔面 潮紅、発汗)	頻度不明：ア レルギー性 肝障害、過敏 症、(便秘、口 渇、心悸亢 進)	本剤過敏症既往 歴	線内腫、高齢者、 妊婦、小児				1日200mg、3~4回分服。 適宜増減。高齢者は減 量。	下記疾患にお ける内臓平滑 筋の痙攣状 状：胃炎・胆道 系疾患、急性 動脈硬化、末 梢循環障害、 冠循環障害に おける血管拡 張と症状の改 善。

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
						適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ				長期使用による健康被害のおそれ
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル 「丸」(内用・外用)	胃粘膜の知覚神経末端を麻痺させ、中枢への刺激伝達を遮断して疼痛、嘔吐を鎮める。		0.1~5%(食欲不振、悪心、口渇、便秘)、0.1%未満(下痢、メトヘモグロビン血症(小児))	頻度不明(過敏症)	本剤過敏症既往歴 乳幼児(内用・坐剤の場合)	高齢者、妊婦又は妊娠の可能性			(内用) 口内にしびれ等を残さないため速やかに飲み下す (外用) 眼には使用しないこと(軟膏・液剤の場合)、誤って吸入しないこと [散布剤の場合]			長期連続投与回避	(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適宜増減。高齢者は減量 (外用) 透膏、5~15%の軟膏剤、液剤、散布剤として、または、1箇中200mg~300mgを含む坐剤として適宜患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴う疼痛・嘔吐、胃炎、胃潰瘍(外用) 下記疾患における鎮痛・鎮痒、日焼け、皮膚潰瘍、掻痒症、痔瘻	
局所麻酔成分	オキシセザゼン ストロカイン錠	局所麻酔作用、ガストリン遊離抑制作用、胃酸分泌抑制作用、胃腸管運動抑制作用		0.1~5%(食欲不振、悪心、口渇、便秘、下痢、頭痛、眩暈)、頻度不明(眠気、脱力感)	0.1~5%(過敏症)	本剤過敏症既往歴	高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、小児			口内にしびれ等を残さないため速やかに飲み下す			長期連続投与回避	1日15~40mg、3~4回分服。高齢者は減量		